

層と黒色のスコリア層の互層になっている。凝灰質砂岩層中には、斜交葉理がみられる。

赤羽根海岸は海食崖が高くそびえ、遠くから見ると、初声層の凝灰質砂岩層とスコリア層がしま模様となり、ゆるやかな向斜構造を示している。そこには白い鳥がたくさんいた。ウミネコの自然

棲息地となっているらしい。

様々な地形構造をはっきりと自分の目で確かめることのできた1日巡検は貴重な体験だったと思う。まだ観察の足りない点はいくつもあると思うが、地形学を初めて身近に感じたような気がする。

(3月2日 式教官指導)

## 東 北 巡 検

上 野 整 子

学生時代最後の東北巡検は、関西出身の人が多く私たちにあって最大の贈り物であった。旅の途中で巡検に参加した者、わんこそばがめあての者なども少なからずいたが、そこはくわしい事前調査をしたので許してもらいたい。

7月11日夕方、十和田市集合。夜行列車組は疲れを隠せない様子。元気だったのは集合前に十和田湖観光にいった約2名。初日は十和田市にて1泊する。ミーティングの後、明日のためにと皆おとなしくねむりについた。

12日はこの巡検メインの日。青森県農業試験場藤坂支場において聴き取りをする。

藤坂支場は、昭和6年、9年とあいついだ冷害に対し水稻の耐冷性品種の育成、冷害防止技術確立をはかるための冷害防止試験地として昭和10年に発足し、いくつかの品種を生みだしている。だが昭和46年の減反政策以来、水稻に関する研究費を削られているそうである。ここで冷害と農業の関係についての詳しい説明を聞いた。また実際に農家の方のお話をということで、県農業経営士の山崎福太郎氏にお願いした。特に興味深かったのは、繰り返し言われた農業は科学であるというお言葉だった。実際山崎さんは昭和55年・56年の冷害の際にも藤坂支場からのアドバイス通りに動き、被害が少なくすんだのだそうである。また、転作奨励金が出されても、転作は決してうまくはいっていないもようで、草の中に麦・大豆が申し分け程度に植えてある畑もみかけられた。今までの巡検で必ずといってよい程問題にあがった農家の花嫁問題がここでもいわれたが、やはりこれから

の農家にとっての切実な問題なのであろう。

次に冷害研究資料館へに行く。ここはこれまでの藤坂支場での冷害研究を一般に知らせるとともに、広く農業に対する理解と知識の向上を図る目的で、旧庁舎を利用して展示館としたものである。昔からの農具・民具・めくら暦や冷害実態パネル、標本玄米など興味をひくものばかりが展示されていた。

歩いて十和田市農協へ行き、八戸市内の旅館へとやっとたどりつく。夕食後、聞き取りをもとに学習会を行い、疲れていたようでその日はおとなしく就寝する(者もいた)。

13日は八戸市内を見学した後、海岸沿いに南下し、太田名部より陸中丸にて船の旅。事前調査をもとにあれこれ海岸地形について質問する殊勝な者もいれば、スカイダイビングしてくるうみねこに心を奪われ、“果てしなく 空を駆けゆく旅心”とばかりに旅情に酔っている者もいた。残念なことに、船に酔って客室に閉じこもったきりの者も少なからずいたが……。

とにもかくにも太平洋の荒波を真向から受けて屹立する断崖絶壁の連続、幾千万年にも及ぶ陸と海とのすさまじい戦いの跡をみせる奇岩岩礁の数々には圧倒されっぱなしであった。

うみねこのエスコートで浄土ヶ浜に着き、そこから宿泊地の国民宿舎「三王閣」へと向かう。すぐ近くに巨大な白亜紀の遺産である三王岩があった。この雄大きさに感動し、夕方と翌朝早くの2度も見に行った元気なグループもいた。

巡検最後の日は、防災の町田老の象徴である

“田老万里の長城”を見学する。これは津波災害から町を守るための総延長2,433m、高さ10mに及ぶ防浪堤で、二階建ての家よりもまだ高いというしろものである。これでチリ地震津波の被害を防ぐことができたという。

このように学生時代最後の巡検はたくさんの思い出を残して無事に終了し、いつまでも心に残るであろう実り多いものとなったのであった。

(7月11日～14日 三上教官指導)

## 筑波巡検

高橋昌子

一般にはガマと山麓の研究学園都市で知られる筑波山であるが、地質的には古生層にハンレイ岩を捕獲岩とした花崗岩が貫入し、さらに侵食によって山頂にハンレイ岩が表出する格好となった珍しいタイプの山である。よって私達も出発前からその山容をこの目で確かめようという意欲に燃えていた。

当日10時に筑波駅前からバスに乗車。アカマツ林にはさまれたカーブの多い道を登り、標高240m地点へ行く。山麓より山腹の方が温暖なので集落が発達した好例である。早速露頭の観察を行なった。ペディメントをなす岩石の小さなものの風化土壌である。ボロボロと乾燥した感じで、火山灰層のベッタリした感じとは異っている。花崗岩の大石も各所にみられるが、これは基盤ではなく上から落下したものである。頂上から転がってきたハンレイ岩らしい小石もみられた。

少し下って、標高130m付近のみかんの木を見た後は、神社そばから山頂行きのケーブルに乗った。到着後、2つある山頂のうち低い方の男体山頂へ、次いで標高876mの女体山頂へ登る。地中

でできた節理が地表に出て風化作用を受け、そのすき間が広げられたという白っぽくなったハンレイ岩。その下には一面のブナ林が見られる。マツやスギなどの針葉樹林はむしろ下方の北斜面に分布するという。

徒歩で下山したが、その小道のあちこちでハンレイ岩の大石が様々な形態で私達を待ち受けていた。例えば、10m以上の高さを持つ「北斗石」、船が2隻並んだ形の「出船入船石」、2つの大石の上に今にも落ちそうな格好で大石が乗っている「弁慶七戻」など、石の一つ一つに名称が付けられている。

急に眺望が開け、つつじが丘に出た。親子のガマ像の下で再度露頭観察。今度は榛名山あたりから降ってきた鹿沼土と呼ばれる火山灰土の地層であった。花崗岩質の基盤で、水はけのよいこの付近は筑波山唯一の草原地帯である。

こうして、浅海先生指導のもと、期待していた以上の収穫を得て、私達は筑波山を後にした。

(7月13日 浅海教官指導)

## 仙台巡検

堤佳代

まだ残暑厳しい9月6日、初めての宿泊巡検に私達はそれぞれの胸に様々な思いを秘めながら、仙台駅へ集合した。

空はよく晴れていて、「杜の都」仙台は私達を快く迎えてくれているようだった。

井内先生指導のもとになる今回の巡検は、“広